世間知ラズ

Sekenshirazu
Shuntaro Tanikawa

谷川俊太郎

世間知ラズ

著者
谷川俊太郎
発行者
小田久郎
発行所
株式会社思潮社
〒162東京都新宿区市谷砂土原町三―十五
電話(三二六七)八一五三(営業)・八一四一(編集)
FAX(三二六七)八一四二 振替東京八―八一二一
印刷所
相良整版・福田印刷
製本所
越後堂製本
発行日
一九九三年五月五日初版第一刷
一九九三年十月一日第二刷 一九九三年十二月一日第三刷

世間知ラズ

Sekenshirazu

谷川俊太郎
Shuntaro Tanikawa

思潮社

世間知ラズ

谷川俊太郎詩集

思潮社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

裝幀　芦澤泰偉

目次

父の死 10
世間知ラズ 16
マサカリ 18
ひとりで 20
倉渕への道 22
トタン屋根に降る雨 24
もっと滲んで 26
手に負えない夕方 28
ぼくは風邪をひいて 30
いつか土に帰るまでの一日 32
言葉の鍵 34
この人はもう 36

嵐のあと 38
午前二時のサイレント映画 40
古いラジオ 42
夕焼け 44
夜のラジオ 46
いつ立ち去ってもいい場所 48
紙飛行機 50
午前八時 52
夕立の前 54
峠を上りきると 56
一篇 58
鷹繋山 60

北軽井沢日録 62
豌豆のさや 78
心の重力 80
虚空へ 82
理想的な詩の初歩的な説明 84
への字の口 86
雑草の緑 88
のっぺらぼう 90
立ちすくむ 92
初出一覧 94

谷川俊太郎詩集

世間知ラズ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父の死

私の父は九十四歳四ヶ月で死んだ。
死ぬ前日に床屋へ行った。
その夜半寝床で腹の中のものをすっかり出した。
明け方付添いの人に呼ばれて行ってみると、入歯をはずした口を開け能面の翁そっくりの顔になってもう死んでいた。顔は冷たかったが手足はまだ暖かかった。
鼻からも口からも尻の穴からも何も出ず、拭く必要のないくらいきれいな体だった。
自宅で死ぬのは変死扱いになるというので救急車を呼んだ。運ぶ途中も病院に

着いてからも酸素吸入と心臓マッサージをやっていた。馬鹿々々しくなってこちらからそう言ってやめて貰った。
遺体を病院から家へ連れ帰った。
私の息子と私の同棲している女の息子がいっしょに部屋を片付けてくれていた。
監察病院から三人来た。死体検案書の死亡時刻は実際より数時間後の時刻になった。
人が集まってきた。
次々に弔電が来た。
続々花篭が来た。
別居している私の妻が来た。私は二階で女と喧嘩した。
だんだん忙しくなって何がなんだか分からなくなってきた。
夜になって子どもみたいにおうおう泣きながら男が玄関から飛びこんで来た。
「先生死んじゃったァ、先生死んじゃったよォ」と男は叫んだ。
諏訪から来たその男は「まだ電車あるかな、もうないかな、ぼくもう帰る」と泣きながら帰っていった。

天皇皇后から祭粢料というのが来た。袋に金参万円というゴム印が押してあった。
天皇からは勲一等瑞宝章というものが来た。勲章が三個入っていて略章は小さな干からびたレモンの輪切りみたいだった。父はよくレモンの輪切りでかさかさになった脚をこすっていた。
総理大臣からは従三位というのが来た。これには何もついてなかったが、勲章と勲記位記を飾る額縁を売るダイレクトメールがたくさん来た。
父は美男子だったから勲章がよく似合っただろうと思った。
葬儀屋さんがあらゆる葬式のうちで最高なのは食葬ですと言った。
父はやせていたからスープにするしかないと思った。

*

眠りのうちに死は
その静かなすばやい手で
生のあらゆる細部を払いのけたが

祭壇に供えられた花々が萎れるまでの
わずかな時を語り明かす私たちに
馬鹿話の種はつきない

死は未知のもので
未知のものには細部がない
というところが詩に似ている
死も詩も生を要約しがちだが
生き残った者どもは要約よりも
ますます謎めく細部を喜ぶ

*

喪主挨拶

一九八九年十月十六日北鎌倉東慶寺

祭壇に飾ってあります父・徹三と母・多喜子の写真は、五年前母が亡くなって以来ずっと父が身近においていたものです。写真だけでなくお骨も父は手元から離しませんでした。それが父の母への愛情のなせる業だったのか、それとも単に不精だったにすぎないのか、息子である私にもはっきりしませんけれども、本日は異例ではありますが、和尚さんのお許しをえて、父母ふたりのお骨をおかせていただきました。母の葬式は父の考えで、ごく内々にすませましたので、生前の母をご存知だった方々には、本日父とともに母ともお別れをしていただけたと思っております。

息子の目から見ると、父は一生自分本位を貫いた人間で、それ故の孤独もあったかもしれませんが、幸運にかつ幸福に天寿を全うしたと言っていいかと存じます。本日はお忙しい中、父をお見送り下さいまして、ありがとうございました。

*

杉並の建て直す前の昔の家の風呂場で金属の錆びた灰皿を洗っていると、黒

い着物に羽織を着た六十代ころの父が入ってきて、洗濯篭を煉瓦で作った、前と同じ形で大変具合がいいと言った。手を洗って風呂場のずうっと向こうの隅の手ぬぐいかけにかかっている手ぬぐいで手を拭いているので、あの手ぬぐいかけはもっと洗面台の近くに移さねばと思う。父に何か異常はないかときくと大丈夫だと言う。そのときの気持はついヒト月前の父への気持と同じだった。場面が急にロングになって元の伯母の家を庭から見たところになった瞬間、父はもう死んでいるのだと気づいて夢の中で胸がいっぱいになって泣いた。目がさめてもほんとうに泣いたのかどうかは分からなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com